

## 樹木を憶えるとはどういうことか

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 柳澤 直



森林文化アカデミーは樹木同定系の実習が充実している学校です。樹木同定とは、樹木の実物や、ときに写真から分類学上の位置づけを明らかにする行為ですが、ひらたく言えば樹木を見わけることです。アカデミーでは、所属する科や専攻によっても異なりますが、アカデミー周辺の樹木はもちろん、県内の様々な林に出かけて行って多くの樹木について学びます。オーソドックスな、葉を中心とした見分け方を学ぶ実習のほか、冬芽や樹皮で見わけたり、製材されたものや、木製品になったものから材料の木を見わけるともありません。すべての実習内容をマスターできれば、結構すごい人材になっているのではないのでしょうか。

しかし一方で、学生からは実習中に「憶えられる気がしない」「苦痛だ」「私には一生かかっても無理」などの声をきくこともままあります。牧野富太郎博士のように、あふれる植物愛を持ちあわせていければ、息をするように植物を憶えられるかもしれないですが、たしかに好きでもない植物を延々と憶えるのはモチベーションの点ではつらいかもしれません。

ところで生まれつき樹木を憶えるのが苦手という人はいるのでしょうか？ 野生動物、たとえばニホンジカは自分にとって有毒な植物、たとえばワラビは見わけて食べようとしませんが、考えてみれば、見わけられなければ死ぬ確率が高くなり子孫を残せないのが、遺伝的に見わけられる能力を持ち合わせている個体の子孫だけが残ってきたのでしょうか。人間は、というところ、言語などを用いて社会的に集団単位で知識を受け継ぐことができるので、見わけるのが下手な個体がいても、お互いに助け合うことで生きてこられたのかもしれない。



森の中で樹木同定

そう考えると、集団で植物に関する知識や同定能力を保持できれば（つまり得意な人に任せておけば）、個人の同定能力は必ずしも上げなくてよいこととなります。さらに考えを進めて、近い将来Aが進歩して、確実な同定ができるように

なれば、「植物を見わけられる能力」自体が人間には必要とされない時代がくるかもしれません。

しかしはたしてそれでよいのでしょうか？ 私はそうは思いません。私は利用している生き物も含めて、人間が生活している周囲の環境を把握していることが、心の安定に不可欠なのではないかと思っています。現代人の抱えるストレスは、自然と切り離された暮らしによって、周囲の自然環境を把握できなくなっていることが一因なのではないでしょうか。人間が野生動物に近い暮らしをしていた時代、周囲の環境の変化や、食べられる動植物がどこにどれだけいるのか、外敵は近くにいるのか、など正確に把握できていることが暮らしの安心につながっていたのに違いありません。現代では限られた状況を除いて食料を得るのに生物の同定能力は必要ありませんが、周囲の環境に食料の調達、ひいては生存まで左右されていた時代の名残が、心理的な面に影響しているのも不思議ではないと思っています。

アカデミーの学生の皆さんには、せっかくならば身につけた樹木同定の技術、様々な場面で活かすと同時に自然とつながる手段のひとつとしても大事にして欲しいと思っています。